

雲仙噴火記事に見る日英表現の比較

堀 素子

I はじめに

1. 日・英間の深い溝

日本人が何も意識せずごく自然に話したり書いたりしたときの文には、多くの場合主語が無い。このことはもうすでに一般の常識になっているが、日々学生に英文を読ませ、それを日本人に直す作業をしていると、彼女たちの訳文がいかに不自然な日本語であるかにあらためて気づかされる。それは英文には一文ごとに主語・動詞があるのを、きちょうめんにひとつひとつ全部日本語に置きかえるからであるが、それでは自然な日本語にはならない。かといって、それを省略すると、訳している途中で誰が何をするのかわからなくなってしまう。どうしても一度は丁寧に直訳し、それから自然な日本語にもう一度翻訳し直すしかない。

逆のことは和文英訳の時にも言える。元の日本語には主語が無いのがふつうであるから、英語にするときには何を主語にすればいいか、日本語の中から探り出さねばならない。ここでも一度日本語を翻訳しやすい直訳調のいいかたに変えてみる必要がある。

ということは、英語と日本語とはどんなに工夫してもストレートに1対1の対応はできないということである。それはよく言われるように、文の構文が主語・動詞・目的語の順か主語・目的語・動詞の順かというような単純なことではなく、文を発する瞬間、より厳密に言えば、発するより前、頭の中で考えている時点からすで

に発想の仕方が違うからではあるまいか。

このことは、数年前から取り組んでいる敬意表現の日本語・英語の違いを考えている時からずっと私の脳裏を離れないことであるが、今回この雲仙の噴火記事を比較してみて、ここにも大きな発想の違いがあることに気がついた。

昔は私もこのような日英両言語の大きな違いを乗り越えて、すばらしい名訳ができるのは、英文和訳、あるいは和文英訳の技術の問題であると思い、卓越した翻訳者のすばらしいワザにただただ驚嘆していたのであるが、ある程度自分が両方の言語に深くかかわってみると、それは単に一人か二人の卓越した個人の技術によってのみ解決される問題ではないことに気づいてきた。もちろん、そのような個人は、すべての天才がそうであるように、通常人の能力を一気に飛び越える能力を持っているため、二言語間の深い溝を軽々と跳躍してしまう。けれども、昨今のように英語を自由に使いこなすことを多くの「ふつうの能力」の持ち主である日本人が要求されるようになってくると、そのような、名人芸のコツを学生たちに垣間見せるだけでは、実際には何の役にもたたなくなっているのではないだろうか。

ふつうの人間が、名人が飛び越えた溝を渡るためには、その溝を着実に埋めて行くしかない。そしてそのためには、まず溝の深さや幅やその土壌などについてくわしく知らなければならない。これまでは、言ってみれば、過去の「名人のワザ」の表に見えたところだけをすくい取って煎じて薄めて、みなで飲んでいたようなもの

で、その核心をなす部分があることにも気づかず、そのため、それを知ろうともせず、二つの言語の底に横たわる深い溝はいつまでも埋められなかったのである。

2. 日本語はそのまま英語になるか

このように考えて来ると、いわゆる和文英訳は学校でよくやるように一語一語を和英辞典で調べて、それを英語の文法に従って訳していく、ということだけでいいのだろうかという問題が浮かび上がって来る。たとえば雲仙の二度目の大噴火を報道する日英両言語による新聞記事の冒頭を比べてみる。

「長崎県の雲仙・普賢岳（1,359メートル）で8日より起きた最大規模の火砕流により、ふもとの水無川は岩石や火山灰でほぼ埋め尽くされたことが9日、島原署や陸上自衛隊災害派遣部隊の調査で明らかになった。」（朝日新聞1991.6.10）

この文の主語は「水無川」で、火山灰が行う「埋め尽くす」という行為を受けるものである。そして記事全体は警察と自衛隊の調査の報告を知らせる、という間接的な話法になっている。

さて、英文記事の場合はどうなっているだろうか。

After a day of relative quiet, Mount Unzen burst to life again Saturday, setting homes on fire and blacking out a city of 45,000 at the foot of the mountain. (*Mainichi Daily News*, 1991. 6. 10)

（雲仙は土曜日、ふたたび活発な活動をはじめ、山麓の住宅を焼き払い、4万5千の街を停電させた。）

この英語文の主語は、激しい活動を始めた「雲仙」であり、それが家屋を焼き払い、町中を停電させたと明言している。間接話法ではない。

さらに日本語の新聞では上に続いて次のような文がある。

「火砕流の一部は尾根を隔てた南側の赤松谷川へも流れた。」

これは、「流れた」という自動詞を使うことによって、火砕流が「ひとりでに」赤松谷川に流れて行ったように読み取れる。

この部分の英語は冒頭の書き出しに続いて次のように書いてある。

Dark gray plumes billowed out of the volcano as a large eruption Saturday evening sent superhot debris and gas down the 1,357-meter-high mountain's east slope.

（土曜日の大噴火がこの1,375メートルの山の東斜面に高熱の岩石とガスを送り込んだとき、黒ずんだ噴煙が火山から大きく吹き上がった。）

ここでは、火砕流は「ひとりでに」流れたのではなく、火山の噴火がそれを「送り込んだ」という他動詞を使うことにより、動作を行う動作主と、その動作の影響を被る被動作主をはっきり区別している。住宅の火災についても同じような表現の違いが見られる。次の朝日新聞の記事は上の文に続いて出ている。

「火砕流によって発生した300度以上の熱風などで、島原市南木場町をはじめ、川沿いの住宅など計73棟が全半焼した。」

この文でも主語は「住宅など計73棟」であって、それがあたかも「ひとりでに」全半焼したかのように書いてある。確かに「火砕流によって発生した…熱風」ということばがあり、それが原因であることはわかるが、文の構成上では直接の因果関係はない。この場合は熱風が原因であることは誰の目にも明らかであるから問題はないが、そうでないとき、「熱風などで」というようなあいまいな表現をすると、いったい書き手（話し手）は、事態をどう認識しているのか定かではない。

英語では同じことをどのように表現するだろうか。上に続く文である。

The eruption, coming at 7.51 p.m. after a flurry of smaller-scale volcanic activity throughout the day, left several homes burning and cut off electricity to the city of Shimabara, according to a prefectural police official in Nagasaki.

(同日中続いたやや小型の火山活動の後、午後7時51分に起こった噴火は、いくつもの家屋を燃え上がらせ、島原市への送電を止まらせた。長崎県警の発表による。)

ここでも同じく、「噴火」が家を「燃え上がらせ」、街への電気を「止まらせた」とはっきり他動詞を使って断言している。このような表現を読むと、読者の目は知らず知らずのうちにその動作を行ったもの、その結果の原因となったものに向かわずにはいられない。否、書き手(話し手)の側にそのような目があるからこそ、このような表現になるのであろう。

もう一つの点は、日本語の新聞では冒頭の部分にあったように、ニュース全体が警察や自衛隊の調査結果の報告という体裁を取っており、新聞はそれを知らせるという間接的表現になっている。英語の新聞ではニュース・ソースとして最後に長崎県警を出してはいるが、ニュースの内容に関する部分は直接話法できっぱりと言いつけている。もし、これが何か不確かな情報によるものであったなら、“according to…”の句は冒頭に置かれるであろうし、でなければ“it is said,” “it is reported,” “authorities say” などのような「間接話法」であることが明確になるような表現が使われるであろう。

このような表現の違いは単に構文上の違いにとどまらず、今話題の談話構造⁽¹⁾にも関係するだけでなく、より広く深く考えれば、ものの見方の違い、発想の違い、ひいては文化の違い、ということにもなろう。このことについてはまた別に稿を改めて書くことにして、今回は日英の表現上の差に焦点をおいて考えることにする。

そこで本論では、はじめに日本語と英語の動詞を中心とした違いをまとめ、つぎに上に引き続いて、雲仙噴火の新聞記事の中からこれらの

特徴をよく表している文を抽出し、それらが日本語と英語のあいだのどのようなちがいを示しているのか、特にものの見方、発想の原点のちがいがどこにあるのかについて論じ、最後にそれらを踏まえて英語教育への提言を述べることにする。

II 他動詞と自動詞

一般に、文が成立するには述語が必要で、その述語は必ず自動詞か他動詞かのいずれかを取るとされる。何を自動詞と呼び、何を他動詞と呼ぶか、二つの形式の境界線は何かということについてはまだ議論が定まっていらないが、大体次のような定義が妥当と思われる。(ヤコブセン 1989: 239)

他動詞の意味的特徴

- ・ (a) 関与している事物(人物)が二つある。
すなわち、動作主(agent)と対象物(object)である。
- (b) 動作主に意図性がある。
- (c) 対象物は変化を被る。
- (d) 変化は現実の時間において生じる。

自動詞の意味的特徴

- (a) 関与している事物(人物)が一つある。
すなわち、対象物(object)である。
- (b) 対象物は変化を被る。
- (c) 変化は現実の時間において生じる。

この定義によれば、自動詞が他動詞と違う点は(1)動作主が無い(2)従って動作主の意志が無い、ということである。ある言語において、たとえば日本語において、主語の無い文、つまり動作主を欠く文が、そのある文よりも一般的であるとするならば、つまり、他動詞文よりも自動詞文の方が一般的であるとするならば、それはどういうことなのか。ヤコブセンは次のように言っている。

「それらの[他動詞性・自動詞性を形成する]意味要素が一つの概念を構成するようになるのは、論理学上の必然性からではなく、あくまで

も経験によってである。……人間はこの世に生まれてから、自分の周りに様々な事態の変化を経験するわけであるが、その経験の中のある種の変化は普段自発的に起こるか、又は変化する主体がそれ自体に生じさせるようなものであり、また他の種の変化は普段変化する主体以外の何物かによって引き起こされるようなものである。このように、関与しているものが一つか二つかで大きく分けて二種類の変化がある、という認識が自然に生まれて来る。」(p.218)

すなわち、日本人はさまざまな事態の変化を「自発的に起こる」ものとして捉えるやりかたを長い間経験して来たので、そういう認識の仕方そのものが自然に生まれて来るようになって、ということであり、それは換言すれば、日本語の話し手・聞き手の関心は、あるものが他のものにある動作を行なってそれを変化させるということよりも、あるものの上に起こった変化そのものに向けられている、ということでもある。

「それは〔他動詞・自動詞のどちらを文法的に基本的な形式と考えるかということは〕話し手の関心が、あるいは聞き手の関心がそこにあると話し手が信じていることが、「誰がどうしたか」にあるのか、それとも「誰にどういうことが起こったか」「誰がどういう状態に置かれているか」にあるのか、の違いだといってよいだろう。外界に、話し手の注意をひくなんらかの変化が起こったとき、その変化をひき起こしたものの、原因に関心をもつか、その変化を受けたものの、結果（の状態）に関心をもつかの違いだ、といってもよいだろう。」(寺村1982: 206)

このような心理的態度はなんらかの形でことばに反映されるものであろうか。日本語と英語という二つの言語にそれを見るために、雲仙の噴火を伝える新聞記事の中から特に動詞を中心に文を集めてみた。次にそれによって得た結果を、日・英それぞれの特徴別にまとめておく。

III 日本語文と英語文の差

1. 日本語文では動詞の主語をはっきりと示すのを避ける傾向がある。そのためにつぎのような特徴がある。
 - a. 日本語文には主語が無いのがふつうであって、文の成立にとって主語は不可欠の要素ではない。
 - b. そのため動詞、形容詞、形容動詞など、述部のみで状況あるいは情景を描写することが出来る。
 - c. しかしある動作を誰かがやる、ということをも明言する必要がある場合には、助詞「が」でもって主語を明示することはできる。そのような文は有標であって、主語の無いほうが無標である。⁽²⁾
 - d. 日本語文では助詞「は」を伴って一見主語らしく見えるものがあるが、それは実はその文のテーマ、すなわち主題であって、その文が何についての話であるか、という前提を述べているのである。それが動詞の動作を行う動作主であることもあるが、そうでないこともある。⁽³⁾
2. 日本語では無生物を動作の主体とは見なさない傾向がある。そのため無生物、特に自然による災害などは、その原因となった自然物には目を向けず、それによって引き起こされた結果の方に重点を置く。そのため日本語文には次のような特徴がある。
 - a. 無生物が行う動作、すなわち自然の力による破壊などを表現する場合には、文の主語は動作を受けるもの＝被動作主が選ばれる。したがって動詞は受動態となる。
 - b. 無生物による動作の結果、たとえば自然による破壊の結果を表現するには、文の主語はやはりその動作を受けたもの＝被動作主が選ばれる。その場合の動詞は自動詞または状態動詞で、「天災」という言葉があらわすように、自然発生的に「起こった」と表現する。
 - c. 無生物を動作主とした文を作ることは可能であり、文法的に非文であるわけでは

ないが、それはいわゆる翻訳調という印象を与え、自然な感じの文ではない。そのような文はごくふつうの会話にはめったに現れない。(Ⅳに例示する英文記事の直訳的日本語を参照されたい。)

3. 英語文には必ず主語と動詞がある。すなわち、誰か、あるいは何か、を主語として立てないと文は成立しない。したがって日本語と比べて次のような特徴がある。
 - a. 英語文では文の主語は多くの場合その文の動詞を行う動作主である。つまり、主語＝動作主の構図が一般的である。
 - b. 動作を伴わない状態、情景などを述べるときは、itとかthereとかを主語の位置に置いて文を組み立てる。
 - c. 動作主が判らないとき、特定できないとき、あるいは意図的に隠したいときは、被動作主を主語にして動詞を受動態にする。
4. 英語文では主語を生物か無生物かで制限しない。無生物でも生物と同様に意志があるかのように叙述する。
 - a. そのため英語文では自然による災害でも、主語に何かその動作あるいは行動の発生源となるものを置き、能動態で表現する。特に動きのある動作などはほとんどの場合そのようにすると思われる。
 - b. 受動態は、動作、行動が結果として現れた状態を描写するときに使われる。特にそれらの結果の状態を表す名詞を修飾する形で使われることが多い。
 - c. 自動詞は主語が内在的に持っている性質を述べたり、主語が自発的に行う動作、あるいは主語のある状態を描写するときに使われる。いずれの場合にもその動作、状態の主体は主語である。
5. 構文上の問題については本論文ではくわしく触れないが、以下の資料に現れた特徴を簡単にまとめておく。
 - a. 英語の書き言葉では単文が多く、単語自体に複雑な意味を持たせている。⁽⁴⁾
 - b. 日本語では単語一語に複雑な意味をもたせるよりは、いくつもの節や動詞句を埋

め込んで、説明的に文を構成する。したがって複文になることが多い。

- c. 日本語には名詞止めの文がよくある。動きのある動作も名詞の中に閉じ込めてしまう傾向がある。

Ⅳ 報道文の分析

資料としたのは日本文が朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞の中部版、英文が *The Japan Times, Mainichi Daily News* で、いずれも1991年6月10日朝刊の雲仙普賢岳の噴火のニュース記事からである。これは8日に大火砕流が発生した直後の記事なので、各社とも記事内容の正確さには気を配っても、文章にまではあまり注意を払うゆとりは無かったのではないかと思われる、その点でごく自然な日本語なり英語なりで書かれているであろうと判断したからである。そして出来事自体が自然現象なので、記者の生育・教育歴によるゆがみとかがそれほど無く、かなり純粋に言語表現の差が出るのではないかと思ったからである。

A. 日本語の報道文

まずはじめに、日本語の新聞記事から本論文の分析の対象となる文を拾いだしてみる。

1. 主語を隠す動詞の形——受動態

自然現象の場合、日本語では自然を主語とはしない。どんな災害でも自然が意志を持ってそれを行ったというふうには表現しない。そのため何が起こったのか正確に記述しようとするならば、自然以外の当事者、すなわちその自然の行為を受けた被害者、能動態ならば目的語となるはずのものが主語となる。

また主語が被動作主なので動詞は受動態になる。次のような描写はその例である。文中、細下線は主語、太下線は動詞を表す。繰り返しているが、この場合の主語は意味の上では動詞の動作を受ける被動作主であって、動作を行う主体ではない。なお文中の関係節は[]でくくって示す。

- (1) 長崎県・雲仙の普賢岳は9日、一日中山頂

付近が雲に覆われ、・・・

- (2) 普賢岳の地獄跡火口では5月20日の溶岩ドーム出現以来、地下から溶岩が絶えず供給されている。
- (3) [東側斜面に形成された]溶岩塊は安定を失って崩落したり、吹き飛ばされて火砕流を発生させたと思われる。
- (4) 上流の眼鏡橋付近は一面をさらに厚い土砂で覆われ、・・・
- (5) 3日の大火砕流で犠牲になった4人の行方不明者が残されている・・・
- (6) [流路となった]水無川は火山灰や溶岩塊で埋め尽くされ、・・・
- (7) 火山噴火予知連絡会は「火山性微動が続いており、火砕流は今後もくりかえされる」として・・・
- (8) 赤松谷川方向へ長さ5、6百メートル、幅数十メートルにわたるヒノキ林がなぎ倒されている。
- (9) 火口付近は厚い雲に覆われて、・・・
- (10) ふもとの水無川は岩石や火山灰でほぼ埋め尽くされたことが・・・
- (11) 島原市、南高来郡深江町では、・・・新たな火砕流も起きるなど、終日緊迫した雰囲気に含まれた。

これらは主文に現れた受動態であるが、埋め込まれた文、すなわち形容詞節として名詞を修飾するものの中にも、このような受動態はたくさんある。

次にそれらの形容詞節の中の受動態を例示しよう。文中の太下線は動詞、細下線はその動詞の動作を受ける語、すなわち被動作主を示す。これは完全な文であれば受動態の主語となるはずの語である。形容詞節は[]でくくって示す。

- (12) [火砕流に覆われた] 島原、深江二市町で・・・
- (13) [火砕流によって運ばれた] 土砂は・・・
- (14) [[再び発生した] 長崎県雲仙普賢岳の大火砕流に襲われた] 同県島原市、南高来郡深江町では、・・・

このような描写はわれわれには非常になじみ深いものなので、読んでいてなんの違和感も感じない。これらの文には何がそのような火砕流なり噴火なりを起こしたのか、いちいち書いていない。書いてなくても読者にはわかるのである。火砕流や火山の噴火は自然現象であって、誰かが意図的にやったことではない。だからこれ以外、表現のしようがない。これがわれわれがごくふつうに日本語を話したり書いたりするときの感覚である。

しかし、のちに例示するように同じ現象を能動的に表現する英文と比較すると、いかに書き手、この場合は新聞記者の目が、事態の原因ではなく結果に向けられているかということがよくわかる。しかもその表現の方法がすべて受身で、それこそ文字どおり天から降ってきた災害をそのままなすすべもなく受け入れている姿勢がありありと見える。

次に、自然現象ではなく明らかに人間が関与している場合の受動態表現の例をあげよう。上と同様、太下線は動詞、細下線はその動詞の動作を受ける被動作主（受動態の意味上の主語）を示す。これらの文の場合は、はっきりとした動作主がわかっているにもかかわらず、それを明示せず、その代わりに動作を受ける側、被動作主を前面に出す。形容詞節は[]で、主語あるいは目的語として使われた名詞節は{ }でくくって示す。

- (15) {新たに警戒区域に指定された}のは、深江町の川原端、柴原、上瀬野の三地区。
- (16) すぐ近くに、[置き去りにされた]数頭の牛が見えた。
- (17) [雨戸が固く閉められた] 家が多く、・・・
- (18) 長崎県・雲仙岳で8日夜発生した最大規模の火砕流で、降灰が・・・大分県日田市をはじめ、福岡、佐賀両市でも9日未明、観測されるなど・・・
- (19) 火山地質課長も「火山れきの散り方に、爆発時に特徴的な規則性が見られない」と支持する。

- (20) {火口東側斜面に新しい溶岩塊のせり出し
が確認された} のは・・・
- (21) [[立ち入りが禁止された] 警戒区域に隣り
合う] 島原新湊町二丁目の松が丘団地。
- (22) {溶岩塊はいまも成長を続けている}とみら
れ、・・・

このほか前に引用した(3)(5)にも同じ形の人為
的受身が含まれている。

- (3) {東側斜面に形成された溶岩塊は安定を失
って崩落したり、吹き飛ばされて火砕流を發
生させた} と思われる。
- (5) [{3日の大火砕流で犠牲になった4人の行
方不明者が残されている} と思われる] 北上
木場町も、・・・

このように「指定する」「置き去りにする」「閉
める」「観測する」「見る」「確認する」「禁止す
る」「みる」「思う」などの動作を行った人間が
あきらかに存在するときでも、それを「誰がし
た」と明言せずに、このような自然発生的な受
身の形で表現する。これは英文と比較すると直
ちに明瞭になることであるが、われわれにとっ
てはあまりにも自然であるためこのことに気が
つかない。

2. 主語を明示する動詞の形——自動詞および 状態動詞

上述のごとく、主語を明示しない方法の一つ
として他動詞の受動態が使われるが、それより
もより一層日本語の非他動詞発想を示すものは、
自動詞および状態動詞の多用である。これらの
動詞は元来、あるものの変化が自然発生的に生
ずると考えるところから生まれるもので、本来
の動作主を全く覆い隠してしまうことさえある。
したがって文の主語はあってもそれはその状態
を述べるためのものであって、何がその状態を
もたらしたかということには言及しない。あた
かもそのことが自然発生的に起こったかのご
とく述べるのである。あるいはある動作、行為の
結果をそのまま述べるのである。ここでいう状
態動詞とは、「～である」「～している」「～にな

る」等をいう。

下に自動詞を使って噴火の状況を描写した例
と、状態動詞を使ってその結果を述べた例をい
くつか拾ってみる。主語は細下線で、一般の自
動詞は太下線で、状態動詞は点線で示す。関係
節は[]で、名詞節は{ }でくくる。なお
一文の中に複数の節が重なって埋め込まれてい
る場合には、それぞれの節の始まりと終わりに
同じ数字を振ってそれがひとまとまりの節であ
ることを示すこととする。

- (23) ₁{₂[₃[長崎県・雲仙の普賢岳で8日起き
た]₃大きな火砕流は、₄[₅[頂上に出来た]₅溶
岩塊が次々に崩れ落ちる]₄形で・・・最大規模
の流れとなった]₂可能性が高い}₁ことが・・・
わかった。
- (24) 「溶岩塊が不安定になれば崩壊が起き、崩壊
が起きれば一時的に安定を取り戻す・・・」
- (25) 「[マグマの動きが収まったのではな
く、・・・スムーズになった]証拠」
- (26) 「あの水無川が埋没している。」
- (27) 火砕流の一部は・・・赤松谷川へも流れ込
んでいた。
- (28) 民家が炎を上げ燃えていた。
- (29) 塊状溶岩の形がどう変わったのか、どのく
らいの崩落があったのか、・・・
- (30) 北上木場町はさらに厚い火山灰で埋まった。
- (31) [土砂がせり上がった]川や、₁[₂[ひと抱え
もある]₂溶岩塊が葉たばこ畑や路上にゴロゴ
ロと転がる]₁惨状に・・・
- (32) [あふれた]溶岩塊が・・・
- (33) [今後も火砕流が繰り返し起きる]恐れがあ
る」
- (34) 「道が埋没しているうえ・・・」
- (35) 川沿いの住宅など計73棟が全半焼した。
- (36) 「[今後も規模の大きな火砕流、降雨による
土石流が発生する]恐れがある」
- (37) 溶岩塊の大半が崩落して・・・

なお上に引用した(5)(6)(14)にも同様の自動詞的
表現がある。

- (5) ₁[₂{₃[3日の大火砕流で犠牲になった]₃4

人の行方不明者が残されている}₂と思われる}₁北上木場町も・・・

- (6) [流路となった]水無川は火山灰や溶岩塊で埋め尽くされ、・・・
- (14) ₁[₂[再び発生した]₂長崎県雲仙普賢岳の大火砕流に襲われた]₁同県島原市、南高来郡深江町では、・・・

これらの自動詞表現は、変化を生じた被動作主を主語としている点で、寺村がいうように「自動詞表現と、受動態の表現とは、ある部分で連続している」(1982:209)よい例である。ここで主語になっている「噴火」や「火砕流」や「火災」は、英語ではふつうは自動詞の主語とはならず、他動詞の目的語となる。つまり、英語ではこれらは何か別のものの働きによって生じたものであって、自ら自然に発生したのではないとするのである。

3. 主語を明示する動詞の形——他動詞の能動態

どんなに少なくとも動作主をそのまま主語とした他動詞文も無いわけではない。下に例示したのが6月10日の3紙の雲仙関連記事全部を合わせたもののすべてである。細下線は主語、太下線は他動詞、波線はその目的語を示す。関係節は[]で示す。

- (39) 空も、地上も。白い火山灰が町を覆った。
- (40) [再び襲った]大火砕流から一夜明けた九日の長崎県島原市。
- (41) [溶岩塊の大半が崩落して前日の大火砕流を引き起こした]可能性が強い・・・
- (42) [水無川を埋めた]火砕流は・・・
- (43) ・・・溶岩塊が・・・火砕流を連続的に発生させ、・・・
- (44) [火砕流によって運ばれた]土砂は・・・白新橋までをすっぽりと覆い、・・・
- (45) 水無川はすっかり姿を変え、あふれた溶岩塊が沿岸の樹木を根こそぎ倒している。
- (46) 北上木場町も、相次ぐ火砕流で1メートル近い火山灰が覆う。
- (47) ビニールハウスは、高熱で黒く焦げた鉄パ

イプが無惨な姿をさらす。

上に引用した(3)にも他動詞が含まれている。

- (3) [東側斜面に形成された]溶岩塊は安定を失って崩落したり、吹き飛ばされて火砕流を発生させたと思われる。

この10例のうち、(3)および(39)～(43)までは朝日と毎日を合わせた7箇所の記事から見つけたものであるが、上に引用した自動詞、他動詞の受動態に比べていかにもその数が少ない。なお(44)～(47)までの4例は日経の1記事からのものなので、これがたった一つの記事に集中していることを考えると、この4例はもしかすると記者の個人的文体の特徴なのかも知れない。(5)

B. 英語の報道文

英字新聞にはその読者層の多くが外国人であることを予想し、国内のニュースよりも国外のニュースに紙面の多くを割くことが多い。そのため日本語の新聞が多くのスペースを雲仙噴火の記事に当てていた6月10日の朝刊でさえ、*The Japan Times*と*Mainichi Daily News*両紙ともただ一箇所を当てているに過ぎない。しかし雲仙に引き続いて起こったフィリピンのピナツボ火山噴火に関しては、近くに米軍基地があるということもあって毎日のようにかなりくわしく報道していた。それとちょうど反対に日本語の新聞はこのピナツボ火山のニュースは数日に一度、それもほんの小さなスペースで報じただけであった。雲仙の記事だけでは英文の資料が不足するときにはピナツボの記事も使わなくてはと思っていたが、二つの記事だけで十分な量の資料が集められたので、ここではピナツボ関連の記事は使わない。ただ、ニュースの量の違いということは、言語以外の問題として指摘しておいてもよいと思う。

1. 他動詞の能動態

本論文の冒頭で述べたように、英語では無生物を主語におくことにまったく抵抗が無い。以下の例文にそれがよく現れている。日本語の例

文と同様、主語は細下線、動詞は太下線、目的語は波線、関係節は[], 名詞節は{ }, 分詞句などの動詞句はく で示す。なお参考のためにできるだけ英文に忠実な日本語を付けておく。

(48) Mount Unzen spewed forth a torrent of hot gas, ash and rock debris Saturday ...
(土曜日、雲仙岳は高熱のガスと灰と岩屑の奔流を吐き出した。)

(49) ... the blast [that killed at least 37 people Monday].
([月曜日に少なくとも37人を殺した]爆風・・・)

(50) The superhot pyroclastic flow set houses and forests along Mizunashi River on fire.
(超高熱の火砕流は水無川沿いの家や森林に火を付けた・・・)

(51) The volcano released two pyroclastic flows Saturday ...
(この火山は土曜日火砕流を2回放出した・・・)

(52) Large amounts of volcanic ash covered Kitakami Kobamachi in Shimabara and the Mizunashi River, ...
(火山灰の大量が島原市の北上木場町と水無川を覆った・・・)

(53) Scientists ... reported seven pyroclastic flows in the five hours ...
(科学者たちは5時間のうちに7回の火砕流を報告した・・・)

(54) The volcano released another large-scale torrent of hot gas, ash and rock debris at 9:20 p.m.
(この火山は午後9時20分にもう一度高熱のガスと灰と岩屑の大量の奔流を放出した。)

(55) ... the major eruption on Monday [that left at least 37 people dead].
([少なくとも37人を死なせた]月曜日の主たる噴火・・・)

(56) The renewed volcanic activity, however, kept them from recovering any bodies .

(しかしながらこのふたたび開始された火山活動は、彼らを遺体を取り戻すことから遠ざけた。)

(57) ... rain could cause deadly mud slides.
(雨が、死をもたらすような泥流を引き起こすかもしれない・・・)

(58) Mount Unzen's eruption set homes on fire and blackened out the city of Shimabara at the foot of the mountain.
(雲仙岳の噴火は、麓の島原市に火を付け、町を暗闇にした。)

(59) ... a large-scale eruption sent superhot debris and gas down the 1,357-meter-tall mountain's east slope.
(大規模の噴火は、標高1,357メートルの山の東側斜面に、超高熱の岩屑とガスを送りだした。)

(60) ... Mount Unzen burst to life again Saturday, <setting homes on fire and blackening out a city of 45,000 at the foot of the mountain>.
(雲仙岳は土曜日ふたたび活発に爆発し、山麓の人口四万五千の市の家々に火を付け、町を暗闇にした。)

(61) The eruption, ... , left several homes burning and cut off electricity to the city of Shimabara ...
(この噴火は、島原市のいくつかの家を燃えながままにし町の電気を切った・・・)

(62) ... a further eruption would see the flow <reach the coast>
(これからの噴火はこの流れが海岸に達するのを見るであろう・・・)

(63) ... the lava ... <causing further fires, and destroying most of the houses along the Mizunashi River>.
(この溶岩は、<さらに火災を引き起こし>、<水無川沿いのほとんどの家を破壊して>・・・)

(64) The eruption also sent showers of molten rock ...
(この噴火はまた、溶岩の雨を送った・・・)

(65) ... because they (pyroclastic flows)

involve extremely hot gas, rock and other volcanic material . . .

(なぜなら、これら(火砕流)は極度に高熱のガスと岩石とその他の火山成分を含んでいるので．．．)

(66) Shimabara municipal authorities ordered additional sections of the city <placed off-limits> .

(島原市当局はさらに市の他の地区をもく立入禁止とする)ことを命じた。)

わずか二紙のたった二つの記事の中にこれほど多くのSVO型の文(主語と目的語を持つ他動詞文)がある。これらの文の主語はほとんどが「雲仙」「火山」「噴火」「爆風」「火砕流」「溶岩」「雨」「火山灰」など無生物で、日本語ではまず他動詞の主語とはならないものばかりである。英語としてはきわめて歯切れのいい文で、火山があたかも意志を持って活動しているような印象を与えるが、括弧内のように直訳した日本語はいかにも不自然で、到底ふつうに日本人が書く文章とは思われない。そうでない自然な日本語は上に引用した新聞記事のような文であるが、そこではこの火山の活動的な動きよりも、活動が終わった後の結果を叙述する調子になっている。このことは、ほとんど同じことを伝えている(1)~(14)、(23)~(37)の日本語と比べてみるとよくわかる。

2. 他動詞の受動態

では英語には動作を受ける側からの描写はひとつも無いのかというと、そんなことはない。次に示すように被害物に焦点を置いた文もあることはある。まず他動詞を受身にしたものを持ってみよう。上の例と同様、主語(この場合動作を受けるもの)には細下線、動詞には太下線を引く。

(67) About 60 houses were destroyed by fire in Shimabara and the adjacent town of Fukae . . .

(約60の家が、島原市とそれに隣接する深江町で火事によって破壊された．．．)

(68) . . . about 15 homes were gutted in Fukae . . .

(深江町では約15の家が焼き払われた．．．)

(69) . . . they (a GSDF helicopter crew) were thwarted by cloud cover.

(彼ら(陸上自衛隊のヘリコプター乗組員)は、雲の遮蔽によって邪魔された。)

(70) The bodies of 27 people . . . have already been recovered.

(27人の遺体はすでに取り戻された。)

(71) Six other people [who had been hospitalized . . .]

([入院させられた]他の6人．．．)

(72) . . . as the bodies of victims . . . are found.
(犠牲者の遺体は見つかっているので．．．)

完全な文の形の受動態は以上の6例だけであるが、動詞句として過去分詞が名詞を修飾する形のものを探してみよう。該当する部分はくくでくって示す。動詞句を形成している過去分詞は太下線で、その動詞に修飾される名詞、すなわちその動詞の意味上の主語は細下線で示す。

(73) Sorrounding farm fields and woods appeared brown, <apparently scorched by volcanic ash> .

(周囲の田畑や森林は、<あきらかに火山灰に焼け焦がされて>茶色に見えた。)

(74) . . . four people <still listed as missing> and ₁ <presumed ₂ <killed in the major eruption on Monday> ₂> ₁ . . .

(<まだ行方不明としてリストに載せられている>が、₁<おそらくは月曜日の主たる噴火で殺された>₂と思われる>₁ 4人の人．．．)

(75) . . . because of the ash and debris <already accumulated on the mountain-side> . . .

(<すでに山麓に堆積されている> 灰と岩屑のために．．．)

(76) The total number of people <affected thus> . . .

(<このように影響された> 人々の総数．．．)

(77) ... many of them <forced to live in local school gymnasiums>.

(〈地域の学校の体育館に住むことを余儀なくされた〉彼らの多く・・・)

(78) Reporters in a helicopter <chartered by Kyodo News Service> ...

(〈共同通信社にチャーターされた〉ヘリコプターの中の記者たち・・・)

ここで修飾されている名詞、すなわち動詞句の意味上の主語になっているのはほとんどが「人」と「家」と「田畑・森林」であり、あきらかに被害を受けた当事者である。他にそのような純粋な被害者でなくて、単に動作を受けたものとして受動態で修飾されているのは「灰・岩屑」(75)と「ヘリコプター」(78)がある。しかしこれらすべての動詞句内のできごとはあきらかに過去のこととして、ある行為の結果として述べていることがわかる。⁽⁶⁾

3. 自動詞

他動詞文は上の主語の所であらかた拾い上げたので、ここでは自動詞文を探してみよう。主語、動詞はこれまでと同様、それぞれ細下線、太下線で示す。

(79) About 45 houses burned down in areas of Shimabara ...

(約45の家が島原市周辺で焼け落ちた・・・)

(80) Surrounding farm fields and woods appeared brown ...

(周囲の田畑や森林は茶色に見えた・・・)

(81) ... pyroclastic flows were moving along the Mizunashi River ...

(火砕流は水無川に沿って動いていた・・・)

(82) The flow stopped at 8:16 p.m. ...

(その流れは8時16分に止まった・・・)

(83) Lightning bolts danced in dark gray plumes of smoke and ash [that billowed from the volcano] ...

([火山からうねり上がった]煙と灰の暗灰色の大雲の中で、稲妻が踊った・・・)

(84) The total number of people ... increased

by about 1,300 to 8,500 ...

(人々の総数は・・・1,300人から8,500人に増えた・・・)

(85) Six other people ... have since died of burns.

(他に6人の人がそれ以後やけどのために死んでいる。)

(86) ... a massive amount of lava had flowed over National Highway 57.

(溶岩のすごい量が国道57号線まで流れ出していた。)

一読して判るように、これらはすべて情景描写の文である。あるものがどういう状態であるか、記者の目に見えたままを叙述している。つまり、英語では動作・行動がすでに終わってその結果だけが目前にあるとき、こんなふうに自動詞を使うらしい。

V 視点の違い

以上雲仙の噴火の新聞記事に見た日本語と英語の表現の違いは、いったい何によるものなのか。ものごと全般を原因よりも結果に、動的変化よりも静的状態に主たる関心を払い目をそこに向けるのは、海に囲まれた島国に住み続けてきた日本民族の歴史の中にその原因の一端があるのではなからうか。われわれの先祖は、いかに辛くても島の外に逃れることが出来ないという諦めから、自然が起こす現象は人知を超えたものとして、良いものも悪いものもすべて「ごむりごもつとも」とそのままを受け入れ、それに対抗しようとかそれを打ち砕こうとかとは一度も考えなかったのではなからうか。このような自然に対する従順とも無責任ともとれる態度は、よく注意してみると日本人の民族性のあらゆるところに顔を覗かせているかもしれない。⁽⁷⁾

いまこうして、同じ自然現象である火山の噴火を、ほとんど逆といってもいいほどの表現の仕方をする日本語と英語という二つの言語を前にして、この違いをどう理解すればいいのだろ

うか。

これまで遠く離れていて接することもなく、単に物のやりとりをするだけの交流しかなかった異なった文化の間では、言語の差は、単語、発音、意味および構文の違いであると考えられていた。しかし現在のように地球の時間的距離が縮まって、異なった文化を持つ民族が互いに人間として顔をつき合わせて理解しなければならなくなってみると、言語の表面的な違いだけを取り上げて「訳して」いたのでは十分ではない。これまで日米間で幾多の摩擦が起こったのも、このような言語と文化の深い部分での相互の理解が不十分、というより、ほとんどできていなかったからではあるまいか。

自然現象のような、誰がみても見まちがいのないような事柄を述べる時でさえこのような表現のずれがあるのに、それよりもっと高度な、より抽象度の高い政治や経済やその他もろもろの人間の知的活動について意見を述べ議論を闘わすときには、どのようなずれがあるか想像もできない。にもかかわらず今までは、翻訳を読み通訳（極端な場合には同時通訳）を聞いて、わかったと思ってきたのである。しかしそれは本当はわかってはいないのではないだろうか。

これは何も「日本特殊論」を蒸し返そうというのではない。特殊なのは日本だけでなくどの国もどの民族もみんなそうなのだ。人間として共通なところを持っているのは当然であるが、それはあくまでも生物学的なレベルのことであって、社会的・文化的存在としての人間は、みな、違うのである。言語もそうであって、人間が使うコミュニケーションの手段としての共通性はあっても、それぞれの言語が担う文化の内容はみな違うのである。日本語の助詞の「ハ」と「ガ」について鋭い観察をした三上章は、日本語の文法が西洋語の文法に毒されていることを批判して、先学たちは「西洋文法を無比判に輸入した」（1960：19）と言っているが、30年を経た今も、言語学者は同じことをしてはいないだろうか。

敢えてこのようなことを問いかけるのは、報道される日米間の数々の摩擦の原因は、単に会議の運び方や交渉のやり方やその他一見解決の

方法がありそうに見えるところにだけでなく、目に見えない、誰も気がつかない、あまりにもあたりまえでその存在さえ認識されないところにもっとも深い根があるのではないか、その深い根を見つけ問題の解決に一步でも近づくような貢献をすることこそ、社会に対する言語学者の義務ではないかと思う故である。

VI 英語教育への提言

1. 英語教育は何を目指すのか

現在日本中の子供は中学校入学と同時に公けに英語を習い始めるが、そもそもそれは何のためか。おそらく旧制中学・女学校の英語の授業の伝統をそのまま引き継いで来たのであろうが、当時の中学校ははっきり言ってエリート予備群の養成所であり、そこでの外国語教育はエリートの教養の一貫としてなされたものであった。しかもそれは外国（すなわち西欧）の進んだ知識を輸入・摂取するためであり、江戸時代までの外国語で書かれた文献に対する対応となら異なるところはなかった。

江戸時代に外国語を学ぶ目的は、それら外国語文献に含まれているエッセンスを飲み込みやすいかたちに変形して吸収することであり、そこで用いられている言語そのものを学ぶことはなかった。外国語をその母国語話者とコミュニケーションする目的で学ぶのはごく少数の通事に限られ、一般にはその必要もなく要望もなかった。そのため明治になってにわかに西洋の学問に通暁することを要請された当時のエリートは、手がかりとなる学習方法も無いまま、優れた頭脳を駆使して日夜刻苦勉励し、短時日の間に欧米の主要言語をものにしたのであった。彼らの中には早い時期に留学し、西洋の空気をその身に振りまきながら、巧みに英語、仏語、独語を操る者もいた。

そのようなエリートの学習方法は旧制高校・中学に引き継がれ、国内での刻苦勉励型、あるいは留学による現地直輸入型の勉強方法が混然として存在していた。すなわち、辞書を丹念に

引き、文法に従って綿密に訳していくいわゆる精読型と、日本語を一気に飛び越してあちらのムードに浸ることによって感覚的にわかろうとする直接法型である。それは彼らがいずれも知的に優れ、経済的に相当余裕のある階層であったから可能であったので、昭和20年を境とする第二次大戦後の全国民総英語学習時代にはまず実行不可能な方法と言ってよい。

しかも戦前の中学・女学校は進学率が非常に低く、限られた層の子女であり、その分だけ生徒の側にも外国語学習の強い欲求があった。だから多分に教養主義的な講読中心の授業でも、そこに「西洋」の息吹が感じられれば、彼らは喜んで辞書を引き、文法を覚え、西洋を垣間見せてくれる言語を我がものにしようと努力したのであろう。

しかし現代の子供たちにとって、「西洋」はなんら珍しくも魅惑的でもない。テレビでは朝から晩までいわゆる外人タレントが愛敬をふりまいているし、自分の身近にも外国に行ったり外国で仕事をしたりしている人間は一人や二人はいる時代である。そして自分も少しお金を貯めれば、簡単に世界中どこへでも行けるし、日本の強い円のおかげで、日本語で用事が足りる国もたくさんある。なにも必死に英語の勉強をして外国に近づく努力をすることはない。

その上、日本の国内にいる限りは日本語だけで完璧に生活できるし、周辺に外国人がいて日夜英語で話さなければならない状況でもない。そうなるといったい何のために苦勞の多い外国語を何年も何年も学校でやらなければならないのか、ということになる。おそらくアンケートを取ったら、英語はやりたくないという中学生、特に2年生、3年生はたくさんいるであろう。ただし、彼らも「学校の英語」がやりたくないなのであって、外国へ行ったとき買物や観光が出来る程度の会話力は欲しいと思っているのである。

にもかかわらず、この小論文の冒頭で述べたように、戦後から今までの英語教育は過去のエリートたちの成果を少しずつ少しずつ噛み砕くようにして子供たちに飲み込ませて来た。それはふつうの能力しかなく、簡単に留学する機会

も得られない子供たちに、過去の恵まれた環境にあったエリートたちと同じ成果を上げることが要求するに等しい。そのような要求を押し付けられた子供たちはそれに答えられない自分に絶望し、そのようなことを要求する教師に反発し、ひいてはその対象である外国語そのもの、およびその言語が具現するその外国に対してさえ反感を抱くようになる。日本の政治家が、英語で演説したりインタビューに応じたりすると、国内で妙な反感を買うのはこのためである。

このようなエリート養成方式が効果的でないとわかると、教育現場では今度は外国で開発された非英語国の子供に英語を教える教授法を直輸入して、日本人の子供に適用しようとした。このように英語教育の方針があちこちふたつく背後には、言語の習得と他の知識の学習とを同じものと見なす言語自体に対する認識の浅さがあったと言ってよい。言語を研究の対象とする言語学が本格的に学問体系として日本に入ってきたのは戦後になってからであり、ほとんど同時に発足した全国民対象の英語教育に貢献するにはまだ未熟であったからである。

しかしいまや言語学は教育現場に十分な貢献をすることができるほどに成熟した。幼児言語学（言語習得）、社会言語学等の知見によれば、言語を習得するということは、その言語の語彙・文法を知るだけではなく、その背後に隠れている膨大な民族の歴史と文化の積み重ねを自己の無意識の領域に組み入れてしまうということである。それは単にその言語を母語とする親から生まれただけでは不十分で、その言語を使う社会で生きていってはいじめて可能となる。したがって人が自分の母国にいて、そこで日常的に使われていない外国語を自分のものとすることはまず不可能と言ってよい。日本人が日本国内にいて、日本人ばかりの中で英語を十分に使いこなす能力を身につけることなど、およそ不可能なのである。

これまで日本の英語教育が何十年もかかって悪戦苦闘してきたにもかかわらず、一向に効果が上がらなかったのは、上で述べたように二つの言語の間には、語彙・文法という目に見える明らかな違いの下に、より深い文化の差がある

ことに気づかなかったせいであろう。そのため母語である日本語、ひいてはその背後にある日本文化に注意を払わず、英語にのみ目を向けていたからであろう。同じことは英語に対しても言える。一つの外国語を学ぶということは、その背後にある文化・社会・歴史の総合体に直面することであるにもかかわらず、これまでの英語教育はただ言語にのみ注目し、それを支えるものにまで目が届かなかった。⁽⁸⁾

ここでいう文化の問題とは、ある一つの言語にはその言語を支える文化の特殊な面、他文化への翻訳不可能な点があるということである。ある言語を真に理解するにはその国の人間に生まれなければならないと言ってもよい。そのようなことは外国語の学習者にはもちろん不可能であるから、母国語以外の言語に対峙したとき、「ある言語を細部に渡るまでその通りに他の言語に翻訳することは不可能であること」そして「言語の背後には外国人には触れることの困難な巨大な未知の世界があること」をはっきり自覚しておくことが必要であろう。

そのような自覚は、日本人が外国に対するときの態度の二つの極限「卑下」か「尊大」からわれわれを解放し、どの言語・文化に対しても適度の距離を保ちつつ、「わからない」ことを前提に、少しでもわかりあえればよい、という謙遜な態度で応対することを可能にするであろう。英語を専門にしている人間は、少しばかり読み書き会話ができるからといって英語に通曉しているなどとは夢にも思わないことだ。「わからない」ことを自覚することは努力を放棄することではなく、「触れることの困難な巨大な未知の世界」を認識することによって、それに触れたい到達したいという意欲を掻き立て、その努力を維持する原動力にすることなのである。

2. 英語教育への具体的提案

(1) 教養のための英語（大学レベル）と実用のための英語（中学・高校レベル）とで教授法を変える。

a. 教養のためには徹底して読むことに専念する。その際、できるだけ英語らしい内容のものを選ぶ。外国人のために分かりやすく書か

れたものとか、旅行案内的なものではなく、生粋の英国人か米国人が自国民のために書いたもの、つまり、英語がなんの遠慮も注釈もなくなのまま出ているものを読ませる。そしてそれを読み進みながら、ページ毎に、あるいはパラグラフ毎に、日本的な発想と違うところを見つけ、それを英語及び英語文化圏理解の糸口にする。このような学習態度は同時に、自分の言語、自分の文化への理解をも深くする。

b. 実用のためには、英語の基本的構造を徹底的に教え込む。複雑な修飾語がつく前の単純な文形を何度も練習させる。その場合できるだけ英国・米国でも日本でも似たようなことが起こる可能性のある状況を選ぶ。単語は、日本語に訳したときそのまま理解できるもの、たとえばすでに片仮名となって日本語に入っているものを、意味がずれているものはそれを修正しながら使う。こうすることによって学習者は状況把握や単語の暗記から解放され、その分だけ構文の差に注目するようになる。英語の基本構造が身についてから英語特有の状況を増やして行けばよい。また単語の選択によって、学習者のレベルや要求に自由に適應することも出来る。いずれにしても実用のためには中学程度以上の複雑な構文を使いこなすことを要求しないことである。発音と聞き取りは、日常身の物の名前と基本的な動作・状態を表す動詞・形容詞の類だけでも最低限出来るようにしておく。ただし、ここでいう「実用のため」とは、国内では外国人に道案内ができる程度、外国では自分で買物や観光ができる程度のことであって、ビジネスの上での実務ではない。

c. 高校・大学の英作文では日常よく使われる口語表現を状況と共に暗記させ、それを基本とした会話文を作る。それは学生や社会人の「会話に上達したい」という欲求にも直結するので、成果が上がると思われる。

和文英訳の練習をする場合にも、名人芸を教える必要はないから、正確な英文が出て来やすいように、主語・動詞を備えた他動詞的な日本文を訳す練習をさせるとよい。

たとえば上の雲仙の報道記事で言えば、(39)「白い火山灰が町を覆った」のような主語・動詞・目的語がそろった文は英訳しやすい。しかし(6)「流路となった水無川は火山灰や溶岩塊で埋め尽くされ・・・」という受動態と埋め込み文のある文はやや難しい。このような文は少し言い換えて「火山灰や溶岩塊が水無川を通ったので、川はそれらで埋められてしまった」というふうに、副詞節に分解するとずっと訳しやすくなる。

また(23)「長崎県・雲仙の普賢岳で8日起きた大きな火砕流は、頂上に出来た溶岩塊が次々に崩れ落ちる形で・・・最大規模の流れとなった可能性が高いことが・・・わかった」のような長い文は少しずつ短く切るとよい。たとえば「長崎県の雲仙・普賢岳では8日、大きな火砕流が発生した。溶岩塊が山頂から流れだしてこの火砕流を形成した。これはこれまでの噴火ではもっとも大きな火砕流であろうと思われる」というふうにすれば、内容は変えることなくしかも英語にするのは非常にやさしくなる。

- d. 実用を目的とするという場合に、一番槍玉に上がるのは会話力であるが、これこそ畳の上の水練となる可能性が一番高いもので、本当にその能力を身につけるためには英語社会に飛び込むしかない。しかし現在の日本でそれをするのは不可能であるから、次善の策としては今各大学その他でよく行われている短期留学がもっとも手っとり早い方法であろう。いかに短期間でも、英語しか通じない社会の中で自分の力で生きて行かなければならなくなったなら、なんとしてでもコミュニケーションしていくものである。それくらいの単語と文を作る能力は持っているはずである。そのためには、留学先で到れり尽くせりの真綿でくるんだような厚いもてなしをしないことであろう。同時に子供を留学させる親の側も、可愛い子には「苦しい」旅をさせるくらいの気構えを持って、やたらにあれこれ大学とか留学先とかに要求しない覚悟が必要であろう。

単位を取るために会話のテキストの文を暗

記するなど悲劇的としかいいようがない。大学その他の日本国内の教育機関で英会話を教えるならば、いまよりはるかに大量の英語話者を投入して学内に疑似英語社会を作ることである。そのような環境を作ってはじめて、日本人がおじけづかないで英語を話すことができるようになるのである。

ただ一つ、国内で、しかも日本人教師で出来ることは、聞き取り能力の向上である。これは現実にはきわめて近い状況を設定し、段階的にその範囲を広げていくようなすぐれたテキストと、それに伴った明瞭な発音のテープがあれば、学生が独習でも出来ることだ。なにも高価なAV装置を買う必要はない。この聞き取り能力は話す能力の基礎であり、それなくしては会話自体が成り立たないにもかかわらず、話す力ほど注目されていないのは残念である。

- (2) 英語の専門家を養成するための教育は(1)とははっきり区別する。
- a. 大学の英文科・英語科の学生は卒業するまでに(1)で述べたこと、すなわち英語を実戦的に使いこなす能力は十二分に身につけておかなければならない。なぜなら世間では、英文学を専攻しようと英語学を専攻しようと、英語と名のつく学問をしたなら、英語は十分に使いこなせるものと期待するからで、またそれが出来ないといくら英文学・英語学で学士号を取ったといっても誰も信用しない。各自の専門はこのような英語の基本能力をマスターした上にこそ築かれてしかるべきであろう。
- b. 英語に限らず外国語を専門にするものは、その大前提として自分の母国語である日本語をしっかり身につけておくべきである。直接的な問題としては、翻訳したり通訳したりするとき、その英単語・英語表現にふさわしい日本語を知らないために、まことに舌足らずな奇妙な訳をしてしまうことがある。あるいは外国人に日本語の意味を聞かれたとき、それを正確に知らないためにきちんとした説明が出来ないこともある。外国語である英語を十分に知らないのはまだ言い訳もできるであ

ろうが、母国語である日本語をよく知らないというのは世界中どこへ行っても笑われるだけで、それこそ国際人の資格はない。

と同時に、日本語の底に流れる日本文化の特質についてもよく認識しておく必要がある。ビジネスを目的するのではなくて外国人が日本人と接触するとき、何を知りたがるかという、彼・彼女の英語力ではなく、彼・彼女が体現する日本そのもの、日本の文化なのだから。あんなに英語を上手に話すのなら、さぞ他の分野にも造詣が深いであろうと彼らは期待する。だから、英語が上手になればなるほど、もっと日本人にならなければならないのである。

そしてさらに、日本語と英語、あるいはその他の外国語とのあいだには、埋めがたい溝、文化の違い、民族の歴史の違いがあることを認識し、そのことを卑下したりそのために傲慢になるのではなく、違った文化・言語を持つ相手を違うが故に尊敬し、同じ人間であるが故にまったく対等な関係を保つよう努力することを怠らないこと、これが外国語や外国の文化を多少とも知る者の取るべき態度であろう。

VII まとめ

以上、雲仙の噴火記事の日英比較から、英語教育への提言まで少しばかり飛躍した議論になったが、一口に言えば「他を知ることは己を知ることであり、己を知らずして他を知ることあたわず」ということである。ことばの難しさはここにある。すなわち、ことばの中にはそれを発する人間の総体、その人間を形成している精神、感覚、情緒等、あらゆるものが凝縮されて一語、一文となって発せられる。「米」という日本語に対応する英語は「rice」であるけれども、「米」という語に対する日本人の気持は「rice」という語に対するアメリカ人の気持とは絶対に同じではない。同様に「fair」という英語に対応する日本語は「公平」であるけれども、それぞれに対して抱く両国民の思いは絶対に同じでは

ない。「神」と「God」、「自然」と「nature」など訳語としてはそれしか無いからこれらは同じものを指す、と思われがちであるが、絶対に同じではない。

「人間みな同じ」というのは、他の動物と比べたときの生物的特徴から見たことであって、社会的存在として見た場合には違うところがたくさんある。それは男性と女性が同じ人間でありながらこんなにも違い、おたがいに何万年もいっしょに暮しながら、まだ相手のことがよくわからないのと同様、違う土地、違う気候に何千年も暮してきた民族は、それぞれ固有の特質を持ち、固有のものの見方をするようになって来ている。

このことは音楽や絵画や彫刻や、その他の文化的な意識の発露にはっきりと見られる。ことばもそれらと同様、否、それ以上にそれぞれの文化を背負って成立しているのであるが、音楽や絵画よりもずっと身近であるが故に、その特質が気づかれぬまま、あたかも水や空気と同じように放っておいてもそこら中に散らばっていると思われているのである。もっとも、ことばに対するこのような楽天的態度は、母国語を奪われるというような悲惨な歴史を経験したことのない日本民族のしあわせの証拠なのかもしれないが。

同じ火山の噴火を報道する記事が、日本語と英語とでまったく異なった表現をする原因は、「自然」ということばそのものが日本古来のやまと言葉ではなく、中国からの輸入語であることから説明することができる。

「何故、ヤマト言葉に「自然」が発見できないのか。それは、古代の日本人が、「自然」を人間に対立する一つの物として、対象として捉えていなかったからであろうと思う。自分に対立する一つの物として、意識のうちに確立していなかった「自然」が、一つの名前を持たずに終わったのは当然ではなからうか。」(大野1966:12)

自然を自分とは別個の、自分と対立する独立した存在と見なければ、それを動作の主体として文の主語に据えて表現することはできない。

そこに、つねに自然を人間と格闘する存在と見なした西欧世界とは異なった表現が現れる由縁であろう。逆に言えば、このような表現があるからこそ、日本人の自然に対する態度がわかるのであって、ことばが無ければそれを知ることすらできない。われわれの言語には、われわれ自身の真の姿を見せてくれる未知の宝がまだ数多く隠されているのである。

[註]

- (1) 談話構造に注意が向けられるようになったのはわりあい最近のことで、文単位の分析だけでは言語を把握することが出来ないことが徐々に認識されてきたことによる。ある一つの文はそれだけで成立するのではなく、その前に発せられた(書かれた)文を受け、その内容を前提として構成される。しかもその構成には自然会話の中でさえ、それぞれの目的にかなったルールがひそんでいて、人は無意識のうちにそのルールに従って会話を展開し終了するのである。

- (2) たとえば次のような二つの会話は、どちらが日本語として自然だろうか。

1. A: 今日あなたは学校にいらっしゃいますか?
B: はい、私は学校にまいります。

2. A: 今日、学校にいらっしゃいますか?
B: はい、まいります。

1は、いわば英語を直訳した日本語で、「あなたは」「私は」の無い2の方が自然に聞こえる。このようになんの前提条件も無しに聞いても違和感が無く自然にひびく文を「無標」(unmarked)という。では次の会話はどうか。

3. A: 今日、PTAにいらっしゃいますか?
B: いいえ、今日は主人がまいります。

Aの意味する主語である「あなた」、すなわちB自身が行くのなら、Bは返事をするとき、2のように主語無しの「まいります」を言うだけでよい。しかし別の人間が行く場合にはそれをはっきりと出して助詞の「が」をつけて、「私ではない別の人間」が際だつように示さなくてはならない。このように無言の前提をくつがえし、期待されたのと異なる文を発するとそれは「有標」(marked)となる。

- (3) 「今日は私はまいります」という文で、「私は」の「は」は主語を示すが、「今日は」の「は」は「今日の会合の出席については」という意味の、文の主題を示すものである。「私は」の「は」も、もっとくわしくいえば「他人のことは知らないが、私について

いうならば」という意味を持ち、「私」を主題化している。この場合、たまたま主題と主語(動作主)が「私」という同一のものであっただけである。このように、主題(題目)の蔭に主語(主格)が隠れているような場合を、三上(1960)は「Xハ」のかけに「Xガ」が潜在していると表現している。

- (4) ふつうに考えられているよりも英語の話し言葉は、単語が簡単だけ構文は複雑になっている。逆に書き言葉では、教養ある知識人として sophisticated の感じを与えるために、重厚な漢語的表現の big words を好んで使う。こうして単語に意味の重要な部分を担わせれば、その分、構文は簡単になる。

- (5) 日本語の報道記事に能動態が少ないことは、チェルノブイリ原発事故の新聞記事を分析した Oshima & Kimura の発表(1991)にもある。同発表によると、チェルノブイリ原発事故を報じたある一日の新聞記事の中の能動態対受動態の数は、朝日12:49、読売14:27、毎日24:24であったという。

- (6) Oshima & Kimura (1991) はまた、アメリカと日本の英語の新聞のチェルノブイリ報道で使われた動詞の数を数えている。以下にその一部を引用する。

	<i>Washington Post</i>	<i>Guardian</i>	<i>Mainichi</i>	<i>Japan Times</i>
Passive(受動態)	23	28	10	11
Main Cl.(主節)	3	3	0	1
Sub. Cl.(従属節)	17	16	10	10
Simple S.(単文)	3	9	0	0
Active(能動態)	85	67	62	84
Main Cl.(主節)	26	14	30	27
Sub. Cl.(従属節)	40	30	32	49
Simple S.(単文)	19	23	10	8

これを見てもやはり受動態よりも能動態の数が圧倒的に多い。しかも受動態は主節の主動詞としてより、従属節の中の方にはるかに多く現れている。これは本論で述べたのと同じことを示している。

- (7) 日本人が古来自然をどのように捉えて来たかについて仲田(1982)は天災に対する態度の一つとして「天譴論(てんけんろん)」を紹介している。これはもともと儒教の思想であるが、奈良・平安時代には「為政者に対する天の譴責」という意味であったのが、大正9年(1923)の関東大震災の時には「浮かれすぎ、墮落した人々を懲らしめ、あるいはその目をさませんがために天が地震を起こした」という意味で使われたという。このような考え方に当時の知識人を含め多くの人が賛意を示したということは、日本人が災害の原因を物理化学的に極めるのではなく、

「自虐的」な「非合理的観念」によって処理する傾向があることを示している。

しかも同じような態度は現在も続いており、仲田らが1981年に岩手県で行なった調査には、「天譴論」に一部でも共感できるという回答が半数近くあった。また、災害は全くの自然現象であると思う人が68%強あったにもかかわらず、大地震、大津波などによる被害を食い止めることはできないとする人がそれぞれ64%強、52%強あった。これは関東大震災のときの体験記・手記に見られる天災を前にしたときの日本人の「あきらめ」「無力感」と重なる結果である、と仲田は述べている。

(8)最近日本の英語教育界でもようやく文化的なものへの目が開かれはじめたが、それは英語という言語が英国人と米国人の占有物ではなく、黒人の話す英語、ヒスパニックの話す英語、インド人の話す英語、アフリカ人の話す英語、日本人の話す英語、というような、異なった文化の人間が使う英語をもりっぱな英語として認めようという、いわゆる「グローバルな視点」からの発想である。しかしそれは、本論でいうある言語が体现する文化それ自体に視点を据えるということではない。

参考文献

- 三上 章 『象は鼻が長い』 東京：くろしお出版 1960 (1991版)
- 仲田 誠 「災害と日本人——「心理的現象」としての自然災害——」 日本心理学会編『年報社会心理学第23号1982 公と私の社会心理学』 東京：勁草書房 pp.171~186
- 大野 晋 『日本語の年輪』(新潮文庫) 東京：新潮社 1966 (1989版)
- Oshima, Makoto & Kimura K. Sanae, "How was Chernobyl Reported?—An English-Japanese Comparative Study of Rhetorical Functions in Prose Types." Handout for 18th International Systemic Congress, August 1991 at International Christian University, Tokyo.
- 寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』 東京：くろしお出版 1982
- ウェスリー・M・ヤコブセン 「他動性とプロトタイプ論」 久野 暉・柴谷方良共編 『日本語学の新展開』 東京：くろしお出版 1989 pp.213~248

[summary]

This paper presents one of many covert characteristics in language that is seldom noticed by native speakers. The point of discussion is the description of natural disasters both in Japanese and in English. Data were taken from newspapers in both languages published in Japan, reporting the eruption of Mount Unzen on June 8, 1991.

The analysis shows that the Japanese language seems to regard such disaster as a natural 'occurrence' using intransitive verbs to describe the activity of the volcano. When intransitives cannot describe the actual 'activity' of the volcano or the people involved, the Japanese language uses transitives though almost solely in the passive voice.

On the contrary, the English language prefers active transitives to passives or intransitives. It never hesitates to employ inanimate subjects; therefore, the description sounds as if nature had some intention to cause such disasters compared to the static Japanese way of describing the same phenomena.

Such differences in the description must suggest some fundamental difference in the attitude toward nature in both languages, far deeper and more basic than the difference in vocabulary, syntax, and phonology. I believe that such notions must be taken into consideration in language classes. Thus, the paper concludes by giving some pragmatic suggestions to English teaching in Japan incorporating the result gained from the analysis of the news reports of the Mount Unzen eruption.